

読解と解説

市河寛齋の詠んだ富山
(一)

磯部 祐子

富山大学人文科学研究第80号
2024年2月 抜刷

市河寛齋の詠んだ富山 (一)

磯部 祐子

七、足を運んだ越中各地

市河寛齋は、寛政三年に富山に出仕してから致仕するまでの二十年間に、江戸と富山を五度往復するが、富山周辺に遊び詠んだ詩は少なくない。寛齋の目に富山はどのように映ったか。小論では、寛齋の作品から富山を拠点にして足を運んだ地を取り上げ、その作品に読み込まれた情景を浮かび上がらせたい。寛齋が足跡をとどめた地は、日帰りで行ける富山城下からほど近いところから、城下から数日かけて足を運んだ飛騨と藩との境および天領飛騨にまで及ぶ。

詩の解説に当たっては、富山の地方志や現地調査によって得られた新たな知見を加えることも意図するが、前稿同様、『日本漢詩人選集9 市河寛齋』^一および『江戸詩人選集 五 市河寛齋・大窪詩仏』^二所収の作品については、その旨を明記して理解の一助といたしたい。なお、用いる底本は、『詩集 日本漢詩 第八卷』所収の「文政四年 江戸浅草茅町二丁目 須原屋伊八」出版になる『寛齋先生遺藁』^三である。

一 蔡毅、西岡淳著、研文出版、二〇〇七年。

二 揖斐高著、岩波書店、一九九〇年。

三 汲古書院、昭和六十年。

(1) 富山城から足を延ばして

① 十六夜同諸子遊蓮華寺、陰雲不見月（十六夜 諸子と共に蓮華寺に遊ぶ^四、陰雲にて月を見ず）

祇樹愁雲黒月微 祇樹の愁雲 黒月 微かなり
佳期空与賞心違 佳期 空しく 賞心とは違^なう
苦吟身在清香底 苦吟の身は 清香の底^{うち}に在り
巖桂風傳透暗扉 巖桂 風 傳えて 暗扉を透る

【現代語訳】

境内に暗い雲がかかり満月を過ぎた月がわずかに見えるだけだ。良い季節なのに風流を楽しむ気持ちが台無しである。そんな中で詩作に難儀する私のいる境内に爽やかな香りが漂ってきた。モクセイの香りが風によって暗闇の扉を通り抜けてきたのだ。

【解説】

寛齋は、寛政三年七月六日に、江戸を発して富山に向かった。十五日に到着し、その次の日、風流を解する知人らと蓮華寺に月を愛で行った。しかし、その日、月は隠れ、そこに望んだ詩境はなかった。が、やがて、モクセイの香によって「苦吟の身」に「賞心」はなかった。暗闇の中で、風に乗って訪れたさわやかな秋の香りを嗅覚によって感じ取ったのである。

寛齋の詩には、本詩のように寺院で詠んだ詩が幾首もある。富山藩到着の翌日に月を愛でに蓮華寺に出かけていることからしても、当時、藩主の助力を受けた寺院は、「賞心」を提供する場であったのだろう。なお、蓮華寺は鎌倉時代の末に創建された古刹であったが、富山大空襲で焼失した。

「祇樹」は、祇園精舎の樹林、転じて、寺院の境内をいう。月は、「黒月」「白月」と二分されるが、「黒月」は、満月の翌日から小さ
四 蓮華寺は、富山県富山市にある臨済宗国泰寺派の仏教寺院で、山号は大乗山。富山藩主前田利次の入部に伴い、今日の富山市常盤町から現寺地富山市梅沢町へ移転したが、昭和二十年に焼失したため、その後新たに建造した、という。

くなる月をいい、「白月」は新月から大きくなる月をいう。「巖桂」は、キンモクセイを指す。

寛政三年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁^五。

② 吳山寺（吳山寺）

連峰雪盡日呈青　　連峰　雪盡き　日　青を呈す

人到禪房深處停　　人　禪房の深き處に到り　停まる

只恨雛僧攪吟思　　只恨むらくは　雛僧　吟思を攪することを

六時高誦法華經　　六時　高誦す　法華經

【現代語訳】

立山連峰は雪も消え、日に照らされた空は真つ青だ。私は禪房の奥まで来て逗留している。しかし、小坊主が四六時中お題目を唱えて、私の詩作をかき乱す。

【解説】

吳山寺とは、吳羽山にあった寺を指すと思われるが、法華經を唱えたところから推測して日蓮宗の武運山長久院であると思われる。この寺院は、二代藩主正甫が建てたもので、後に、五代藩主利幸もここを藩の祈願所とし、寺領を寄進し、参詣の人は引きも切らなかつたという。今日では、その面影はないものの、一枚の説明板と小さなお堂があり、日蓮宗の総本山である身延山の七面大明神と同形の像を祀った七面堂があったと記されている。現在の吳羽丘陵は、県道富山高岡線が通り、北側吳羽山と南側城山に二分された形であるが、かつては分かれておらず、富山県を東西に分割する大きな一つの丘陵であった。

さて、その吳羽山にあった武運山長久院は藩主が寄進した寺であり、風光明媚な地とあって、寛齋は、眺望と静寂を求めて足を運んだのかもしれない。そこから眺める立山連峰は、雪も解け、真つ青な空の中に、荘嚴な美しさを見せていた。しかし、小坊主たちが、

五 底本の頁数を示す。以下同じ。

大きな声で題目を唱え、期待した環境ではなかった。そんな思いが「六時高誦す 法華経(四六時中大きな声で法華経を唱える)」という、ややユーモアを込めた表現で表わされている。

「六時」は、四六時中のこと。「吟思」は、詩の言葉をあれこれ吟味すること。

なお、『肯構泉達録』「七面大明神」の項に、「呉山風景勝絶。富山より纒かに一里。詩歌連俳の客吟遊酔地とす。」と記される^六。寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七六頁。

③ 游布瀬四首(布瀬に遊ぶ 四首)

其の一

山夾回流路又斜 山 回流に夾まれ 路も 又た斜めなり

炊煙深閉樹間家 炊煙 深く閉ざされし 樹間の家

取涼時倚高松立 涼を取り 時に 高松に倚りて立てば

喚夏蟬聲和水蛙 夏を喚ぶ蟬聲 水蛙に和す

【現代語訳】

山は河の流れに挟まれ道も斜めだ。煮炊きする人家の煙は深く閉ざされ木々の間にある。涼もうとして時に高い松に寄りかかって立ち止まると、夏の到来を呼ぶ蟬が水の蛙の声に和して鳴いている。

【解説】

「布瀬」は、富山城の西南に位置し、富山城から神通川に沿って磯部を過ぎた地である。かつて、前田正甫のとき、磯部一帯は、非常に大きな人工山(富士山)が築かれ広大な庭園であった^七。正甫死後、まもなくこの庭園は廃されたらしいが、山は「磯部富士」と

六 野崎雅明著・富山県郷土史会校注『肯構泉達録』(中田図書販売、昭和四十九年)四七六頁。

七 古川知明著「富山藩磯部御庭について」『論集 富山城研究』(富山城研究会発行、二〇一七年)所収。

も呼ばれ、大型の築山が明治頃まであったという。詩中の「山」は「磯部富士」と考えることができるかもしれない。「炊烟」は煮炊きする烟であり、布瀬の樹木に囲まれた中に、人家があったのだろう。

江戸期のこの一帯の景色は、「真景圖」（富山市郷土博物館蔵）に、その様子を窺うことができる。「有沢」に渡しが描かれ、神通川をはさんでその向かいの川沿いに「布瀬村」の地名が見える。「真景圖」の布瀬村は、木々が描かれていて、川を眺めることができる集落である。なお、布瀬は高安家が代々十村役（数十カ村を束ねる豪農）に任じられていて、この詩を書いたのは高安家十六代目文助の時代であったが、その十三代目の伝蔵の娘「さわ」は、四代藩主利隆の子を産み、千歩の土地や藩主の書院を拝領するなど、前田家との関係も深かった^九。また、「富山藩主やその一族が御成になることも多く」あったという^{一〇}。或いはそのような関係で、藩校の祭酒たる寛齋も布瀬を訪れたのかもしれない。

其二

緑樹重陰欲夏時　　緑樹　重陰し　夏に欲んとする時
輕颺淡靄総宜詩　　輕颺　淡靄　総らく詩にするに宜し
青苔似待遊人坐　　青苔　遊人の　坐するを待つに似たり
昨雨来過色更滋　　昨雨　来たり過ぎ　色　更に滋し

【現代語訳】

緑の木々が重なって日陰を作り夏になろうとするとき、僅かな涼風や淡い靄はいずれも詩を作るのにふさわしい。青い苔は行楽客に座ってくださいといわんばかりで、昨日、雨が降ったおかげでさらにしっとりとして、苔の緑も一層潤っている。

八 制作年代は不詳。

九 保科齊彦著『加賀藩の十村と十村分役——越中を中心に——』（桂書房、二〇二二年）八九五頁。

一〇 富山県公文書館編『越中の十村（富山県公文書館特別企画展）』（二〇〇六年）九頁。

【解説】

一句目、三句目は、王維「與盧員外象過崔處士興宗林亭」^二の句「綠樹重陰蓋四鄰、青苔日厚自無塵。」が念頭にあったろう。また、二句目の夏の初めを表す「輕颺淡靄」には、陸游「初夏」^三の句「淡靄輕颺入夏初、一窗新綠鳥相呼。」の影響が窺える。四句目の「雨が降り、緑が一層濃くなる」については、「雨中色更滋茂」^三など類似の表現が多くある。「輕颺」は、ほのかな涼風をいう。

其の三

松下行厨酒一壺 松下 行厨 酒一壺
 簞水移就午陰鋪 簞水 移し 午陰に就きて 鋪す
 米家弄筆蘇家睡 米家 筆を弄んで 蘇家 睡る
 宛爾西園雅集圖 宛爾 西園雅集の圖

【現代語訳】

松の木の下の、籠に入った料理に酒一壺を準備し、竹で編んだ涼しげな蔭を午後の木陰に敷く。やがて、米芾のように筆を振るう人あり、蘇軾の如く午睡に就く人ありと、まるでかの西園雅集図のようだ。

【解説】

「西園雅集図」とは、中国の北宋時代に、西園というところに蘇東坡（中国宋代を代表する詩人）や米芾（中国宋代を代表する書家）が集まり、書画など文雅な遊びに興じたという故事に基づき描かれた絵。実際は架空のことともいうが、風雅なこととして絵や詩文を通じて明から清へと伝わり、江戸時代においてもそれを想像して絵が作られた。本詩は、晩春から初夏に移るころ、富山の文人たちが

一一 「須溪先生校本唐王右丞集」卷四。
 一二 「劔南詩稿」卷三十九。
 一三 「欽定古今圖書集成」「方輿匯編・山川典卷」八十二。

集まって楽しむ様を西園雅集図に例えたものである。

「宛爾」は、あるものが他とよく似ていることを表し、まるでの意。

其の四

春江風色惱人情　春江　風色　人情を悩ましむ
向晚輕陰乍又晴　晚に向いて　輕陰　乍たちまち　又た　晴れ
歸路不知山日落　歸路　知らず　山日の落つるを
停節時摘紫雲英　節つえを停める時　紫雲英を摘む

【現代語訳】

春の川の景色はあれこれ詩作を掻き立てる。夕方になるころ薄曇りとなったかと思うとたちまち晴れた。帰り道、山から日が落ちるのに気づかず、杖を休めて蓮華を摘む。

【解説】

「歸路」とあることから、文雅な遊びに興じた後のことである。帰り道、晩春の河はなお詩作を掻き立てる。ましてや天気は薄曇りから清々しい晴れ空へと好転したのだから。歸路につきつつも、日が落ちることを忘れ、道端の春の野花にいつまでも目を注ぐ寛齋の姿がうたわれている。

以上、四首の詩は、晩春から初夏に向かうとき、歩を進めながら目にした風景の客観的描写（第一首）、主観的に記す風景の点描（第二首）、その風景の中で風流な遊びに興じる文人たち（第三首）、余韻が残る中、歸路の風景にまだ心が奪われている作者（第四首）という構成になっている。それは一日の時間の経過に従って詠んだものといってもよいだろう。初めて訪れた布瀬の地で、美しい景の下、富山の文人との楽しい交流の時を過ごしたことが本詩の背景にはある。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』卷一、二七六頁。

(2) 海老江に遊ぶ

① 乙卯二月廿二日與君壽克卿國寶及兒亥同遊蟹江早發（乙卯二月廿二日、君壽、克卿、國寶及び兒亥と與に蟹江に遊ばんと早發す）

如許春晴奈興何 許かくの如きき春晴 興きようを奈いかん何せんせん

橋頭残月踏霜過 橋頭 残月 霜を踏みて過ぐ

偷閑始識閑多味 閑ひまを偷ひまみて 始はじめて 識しる 閑の多味なるを

貪看蒼鳧浴素波 貪むさほりて看みる 蒼鳧ふ 素波そなみに浴するを

【現代語訳】

このような春の晴れの日、どう楽しもうか。橋の先方の残月を見ながら、霜を踏んで進む。閑な時間を見つけてすごしてみても、初めて、閑には多くの味わいがあることを知った。青い野鴨が水の中で白い波をあげているのを飽くことなく見る。

【解説】

旧暦の二月廿二日は、春とは言え、越中はまだまだ寒く曇天が続く。それゆえに晴れ渡る日はこの上なくうれしい。朝早く家を出ると、まだ残月が橋の先に見え、それを目にしながら白い霜を踏みしめて出発する。忙しい日々には、この自由な時間が殊のほか得難く感じて、その風景や状況をいつまでも楽しみたくなることもある。特に、気心の知れた友人たちがそばにいればなおさらであろう。

ところで、今回の同行者は、克卿、國寶、君壽と息子三亥の四人である。寛齋は、この時三度目の来越、三亥は二度目である。

克卿とは、越中富山藩士・野崎雅明（一七五七〜一八一六）のこと、克卿は号であろう。祖父の伝助（号は蘇金）は、越中に関する歴史上の出来事を『喚起泉達録』としてまとめたが散逸したため、孫の雅明が『肯構泉達録』として文化一二年に完成させた。この書の序文は、藩儒の岡田英之によるが、その中に「吾ガ友 野崎克卿」と見える。克卿は、その後、藩校広徳館の助教から学止がくしやうになった。

國寶とは、大野拙齋のこと、『続近世百傑傳』^{一四}にその伝記があり、「拙齋、名は鼎、字は國寶、通称十郎、本姓は紀、拙齋はその別號なり。」とある。幼少時から優れた才能（「幼くして敏悟凡児に異なり」）を見せた。そこで人々は僧や医者にしようとしたが好まず、その後、「典奥」すなわち学問の奥義には強い関心を示し、それを究めて行ったようである。「書を妙傳寺に讀む、人事を却掃して典奥を鑽尋す、是に於てか學日に益す進む、一時の耆宿皆遠到を期す。富山の家老某殊に其才を愛し、厚饒以て學費を資く。上毛の河子靜藩の辟に應じて至るや、一ひ見て遽稱して曰、是國の寶なり。因て以て字とす。」とあるように、妙傳寺^{一五}で学問を修め、寛齋もその才を高く評価して、「国宝」と呼んだ。もちろん、「国」とは「越中の国」という意味である。家老たちは学費を援助した。後、文政二年には、広徳館の祭酒となる。その間、文化九年には昌平黌に入ったが、「学識は卓異、ひそかに敬服せざるものなし」と伝わっている。君壽についての資料はほとんどない。前掲『肯構泉達録』に付された「南山遊行記」^{一六}に、通峽、庵谷、猪谷などを雅明と共に遊んだ人物として「田君壽」の名前が見えるが、この人物を指すのであろう。田とは、田のつく名字を中国風に記したもので、ここでは高田君壽のことで広徳館との関連があった人物であつたと思われるが、詳細は次稿にて記す。

行遊の地は蟹江と書いてあるが、海老江のことであろうか。富山藩及び隣接する加賀藩には、蟹江という地名は見当たらない。蟹は蝦（海老）の間違ひではないかと考える。そうであるとすれば、そこは、岩瀬から放生津に行く道の途中にある。その道は浜街道とも呼ばれ、加賀藩主の参勤交代に用いられた。海老江は、江戸後期には北前船交易や配置業に従事する住民も多くあり、経済的に豊かな人々も生まれたようである。その海老江に、寛齋の学生として、網元兼地主の野上季長^{一七}がいて、またその子の来学、善蔵も寛齋の息子米庵に入門した。市河・野上家両家には深い親交があつたことが知られている。

- 一四 干河岸貫一編（博文館、明治三十四年刊）一〇六―一一一頁。『近世百傑傳』は、本編と続編から成るが、併せて近世の名士二百人が集録されている。
- 一五 当時、妙傳寺は、今日の山王町日枝神社東隣にあつたが、明治三年に、廃仏稀釈による合寺令により梅沢町に移転した。
- 一六 前掲『肯構泉達録』四六二頁。
- 一七 高瀬保著「野上家と市河寛齋・米庵・遂庵」（海老江の歴史編さん委員会編『雄飛に富んだ海老江のあゆみ』（海老江地区自治振興会発行、平成十二年）八六―九二頁。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八一頁。

一方で、蟹ではなく蝦（海老）江と題して詠んだ詩もある。

② 蝦江望海（蝦江にて海を望む）

東北雲愁風正悪 東北 雲 愁い 風 正まに悪し

望中不著箇漁舠 望中 箇かの漁舠とも 著かかず

忽將残却春山雪 忽として 残却せし春山の雪を將もつ

来作滄溟萬丈濤 来りて 滄溟萬丈の濤とを作なす

【現代語訳】

東北に陰暗の雲がこもり、風もちょうど強く吹いてきた。（港には）目にする限り一艘の小舟も着いていない。突如、春山の残雪が青海原に万丈の波を起こしている。

【解説】

富山では、「東風」を「あいのかぜ」や「あゆのかぜ」といい、最近では「愛」とかけて用いられて何かほんわかしたイメージすら抱く人もいるようであるが、厳格には、「北東の風」であるという。また、強い風もあれば弱い風もあり、秋から冬に吹く風もあれば春から夏に吹く風もあるという。また、涼しい時に吹くときもあれば、荒天の時に吹くこともあるという。

大伴家持に、この風のことを詠んだ歌「東風あゆのかぜいたく吹くらし 奈呉なごの海人あまの 釣りする小舟 漕こぎ隠る見ゆ」があり、奈呉（現在の射水市放生津のあたりで、海老江から遠くない）の漁師の小舟が、東北から強く吹く風によって波が高まり、見え隠れしているさまを歌ったものである。本詩もまた、東北から海風が吹き、遠く立山から流れきた雪解けの河水が河口に押し寄せて海の大波に流れ込み、万丈の蒼波を見せる中、漁に出た小舟が一隻とて陸に着けずにいるさまを詠んだものであり、その詩境は、前掲家持の和歌と共通する。寛

齋が、家持の和歌に照らし合わせて、漢文化したものではないかと思われる。

「漁舫」とは、漁に出る小舟のこと。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八一頁。

(3) 南行(一) 富山から飛騨街道を行く

南行とは、その地から南に行くことで、寛齋詩においては、富山城下から南の山岳方面に行くこと、具体的には、八尾や飛騨に行くときに「南行」が用いられている。以下、富山藩領を飛騨に向かう途次に詠んだ詩から紐解く。

寛政九年、寛齋は高山で有名な漢学者赤田臥牛を訪ねる旅に出る。その道中には美しくも険しい越中の自然が横たわっていた。しかもそこは、籠の渡しもあり、詩人にとって心惹かれる場所であったに違いない。その旅に同行したのが道恥師という禅宗の僧侶であった。まずは、道中、道恥師に贈った詩から、旅の様子をうかがおう。

① 道恥師承佛山尊者命導余於飛州。途中有贈(道恥師 佛山尊者の命を承り 余を飛州に導く。途中、贈ること有り)

南山一路伴袈裟 南山一路 袈裟を伴う

到處雲林則作家 到る處 雲林 則ち 家と作す

莫道野人禅味少 野人にて 禅味少なしと 道う莫かれ

笑拈溪畔杜鵑花 笑いて拈ず 溪畔の杜鵑花

【現代語訳】

(道恥師さまが、佛山尊者のご指示で私を飛騨までご案内してくださった折に、道中にてお贈りした詩)

南山への旅に、和尚(道恥師)様が一緒してくださった。到るところ高い山で、和尚様はそこを我が家のようになさっていた。「田舎者で禅僧らしさがまだまだです」などとおっしゃらないでください。(私がそう言うとおなたは)笑いながら溪流の傍らに咲くツツ

ジを一つ摘まれた。

【解説】

飛驒までの旅は道恥師と佛山尊者の助力を得たものであった。『復刻市河寛齋先生』^{一八}にも、寛齋が佛山尊者に宛てた手紙が収められていて、やはり、飛驒までの旅が道恥師の先導のおかげで順調であったこと、すべては佛山尊者の配慮のたまものであることが次のように記される（一）内は筆者訳）。それは四月のことのようである。

「道恥師吾輩を先導して拮据固より勤む。悉く和尚の大慈に出づ。庵谷の險輿渡の危。勇猛精進して幸に安穩彼岸に到るを得たり。飛驒の嶮巍恐らくは當に高く巴蜀の上に出づべし。王陽九折羊腸尚車馬を回へし。・・（道恥師は私を先導してしっかりと役目を果たしてくださいしています。全てあなた様の御慈悲のお陰です。庵谷の川の渡し場の危険なところでも、勇猛果敢に行動してください無事対岸に着くことができました。飛驒のこの危険さは、中国蜀の山道以上かと思えます。漢の王陽が父母に孝を尽くすため、非常に険しい「九折坂」というところを通るのを断念するに至ったようなうねうねと曲がりくねったところですよ。）」。

佛山については、『改訂増補加能郷土辞彙』^{一九}の「仏山海印」の項に、「金沢曹洞宗宝円寺廿四代住持、生国は越中。寛政九年十一月富山光厳寺から進出し、享和元年^{二〇}三月廿一日現住中遷化した。」とあり、「仏山海印」が正式な号で、ここに出てくる佛山尊者のことを指すと思われる。光厳寺は、富山藩初代藩主前田利次（前田利常の次男）によって富山前田家の菩提寺となった曹洞宗の寺院である。その寺院の住持ともなれば、相当な高僧であり、その高名な佛山禪師が遣わしたのが道恥師ということになる。この詩は寛政九年の作（多分、四月）で、佛山尊者は、この年の十一月に、本家加賀藩の宝円寺^{二一}に移ることになるが、そのことは、すでに寛齋の耳にも入っていたであろう。

一八 市河三陽著『復刻市河寛齋先生』（あかぎ出版、平成四年）一九六頁。

一九 日置謙編、北国新聞社刊、一九五六年。

二〇 一八〇一年。

二一 宝円寺は「利家とまつ」の菩提寺」としても知られる。

結句「笑拈溪畔杜鵑花」に見る「拈花」とは花をひねること。禪宗では、「拈花微笑」と四字で用い、仏法を以心伝心で悟った僧侶を讃える言葉である。寛齋のこの度の南行の目的の一つは、飛驒で儒学・漢学の第一人者だった赤田臥牛（一七四七～一八二二）を訪ねることであったが、臥牛には「早春呈佛山大禪師」^三という一首があり、その後半に、「氣連滄海澗、境與白山隣、知有天龍護、拈花是勝因（氣は滄海に連なりて澗く、境は白山と隣す。知んぬ天龍の護り有ることを、拈花は是れ勝因）。」と、「拈花」という語句が用いられている。なお、「早春呈佛山大禪師」詩題に付された割注に「去歲轉住於賀州寶圓寺（去年、加賀藩の宝円寺に移られた）」とあることから、佛山尊者が加賀に移った翌年・寛政十年（一七九八）の作と思われる。道恥師に差し上げた寛齋のこの一首のことを臥牛が知り、臥牛が、その詩に唱和する形で、道恥師の師である佛山禪師に呈する詩の中で「拈花」一語を用いたのかもしれない。寛政九年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八四頁。

富山から飛驒へ行くには、河を渡らなければならない。溪谷の続く中で、比較的穏やかなところは船を用い、それがかなわぬ難所では籠を用いるのが一般的であった。両地を繋ぐ船の渡しは、北から、西笹津と東笹津、岩楯と牛ヶ増、楡原と芦生、楡原と布尻、庵谷と寺津、猪谷と舟渡にあった。次の詩は、庵谷から寺津に向かう渡し船のあたりで詠んだ詩である（十一日に舟津に着く）。

② 風雨過庵嶺（風雨 庵嶺を過ぐ）

天造羊腸險 天 羊腸の險しきを造る

況為風雨行 況んや 風雨の行を為すにおいてをや

暗溪呈暮色 暗溪 暮色を呈し

乱樹助泉聲 乱樹 泉聲を助く

三二 『臥牛山人集初編』（静修館蔵版、文政十年）卷之三「五言排律七首」。

手拍山肩過 手 山肩を拍ちて過ぎ
 心追雲脚輕、心 雲脚を追いて輕し
 途窮邨落出 途 窮まり 邨 落ち出で
 停杖意初平 杖を停めて 意 初めて平らかなり

【現代語訳】

自然が作ったこの険しい道。風雨に打たれながらの道中であれば、なお険しい。薄暗い溪谷に夕闇が近づく。折り重なる木々が溪谷の水の流れの音を更に強くする。手で山膚の平らなところを確かめながら進み、心は動く雲脚を追いかけて、足は軽やかだ。道が尽きて村が目の前にあらわれた。(そこで)杖を休めるとやっとなり気が安らいだ。

【解説】

庵嶺いおりみねとは、庵谷いおりたにのあたりの山嶺のことか。前掲の寛齋が「佛山に宛てた手紙」に「庵谷の險奥渡の危。勇猛精進して幸に安穩彼岸に到るを得たり。」とあり、ここに「庵谷」と見える。ちなみに、明治期に書かれた『東游日録』^{二三}には、「踰庵谷嶺。一水自南來。曰宮川。下合高原川。水勢噴怒。聲如雷。昔時此川以籠渡人。兩岸道路甚險惡。」と記され、「庵谷嶺」とある。現在の、国道四十一号線を富山から高山に下るその道から棚田が見え、目を上に転じれば嶺が見える。そのあたりを指すのであろう。
 寛政九年、『寛齋先生遺藁』卷二、二八五頁。

庵嶺まで、富山城内から飛騨まで幾日要したのであろうか。どのルートを取るかにもよるが、三日ほどはかかったようである。当然のことながら途中で宿をとる。寛齋らが宿泊したのは、片掛(懸)の大淵禪寺という曹洞宗の寺院であった。この寺院については、富

二三 小杉熙『東游日録』(明治四十五年)。小杉熙は、号を復堂(一八五五―一九二八)という。登山家であり漢文学者でもある。

山藩第六代藩主利與が帰依し、文化七年（二八一〇）には、利與十七回忌のため、その側室自仙院^{二四}も参詣し一泊したという記述も残る。このように、大淵禪寺は、富山藩主との関係が極めて深かった。一方、藩校広徳館は、その利與が設けた学校であり、江戸から赴任してきた高名な藩校の祭酒の訪問とあれば当然のことながら温かく迎え入れられたことだろう。そこで、詠んだ詩が「宿大淵禪寺呈悟秀禪師^{二五}」である。

③ 宿大淵禪寺 呈悟秀禪師（大淵禪寺に宿り、悟秀禪師に呈す）

泥路南山遠 泥路 南山 遠く
披蓑到梵宮 蓑を披し 梵宮に到る
僧迎香霧外 僧は 香霧の外に迎え
客宿法雲中 客は 法雲中に宿る
幽味林抽草 幽味の林に 草を抽き
清齋圃摘菘 清齋の圃に 菘を摘む
夜深風雨斂 夜深くして 風雨 斂まり
更覺世情空 更に覺ゆ 世情の空しきを

【現代語訳】

ぬかるみのため南山の道は遠い。蓑傘をまとして寺に着いた。すると、住持僧は寺の外に出て迎えてくれ、俗世の私は仏法の漂う中に宿を借りた。（住持は）薄暗い林でキノコを採り、精進菜の畑で野菜を摘んで精進料理をふるまってくださった。夜が更けて風雨が

二四 自仙院とは、前田利與の側室で利謙の生母となる佳江（江戸の山田茂右衛門娘）のこと。和歌や漢詩を好んだ。

二五 悟秀禪師は、雪庭悟秀といい、大淵寺第二十五代の住職である。

収まると、俗世に身を置く自分が一層空しく感じた。

【解説】

山里の寺院では、自生のキノコや畑で作ったスズナを食していたのかもしれない。雨上がり、寺院での一夜は、俗世が空しく感じるほどの静寂の中にあった。「世情空」は、「(仏法の真理を耳にした時に)俗世が空しく覚える」という意味^{二六}である。

大淵寺は、今も国道四十一号線を富山から高山方面に向かい、道の駅「細入」で西側に上るとその奥にある。この一帯は、江戸時代に銀山として開発されたところで、富山藩の経済を支えた時代もあったという。前掲(注一六)「南山遊行記」は、片掛(懸)及び大淵寺について、「村富饒にして城廓のごとく、屋舎壯麗なり。松間の粉壁を大淵寺と曰う。(村は富み豊かで家々は城や屋敷のよう、建物も壮麗であった。松林の間の白壁は大淵寺という)。^{二七}と記す。ただ、現在では、銀山はなく、「片掛銀山跡」が残るだけで民家もだいぶ少なくなり、昔の面影は、山村にしては荘厳な梵宇の大淵寺に見ることが出来るだけである。

寛政九年、『寛齋先生遺藁』卷二、二八五頁。

一宿の後、寛齋はまた南へ向かう。飛騨までの道中、先述の渡し船の他、籠の渡しと藤橋の方法で川を越えた。籠の渡しは、三か所、片掛と吉野、蟹寺と谷(中山)、西賀澤と東加賀澤にあった。そのなかでも、蟹寺と谷に架かる籠の渡しは難所として知られていた。籠の渡しについて、『猪谷関所館』にその様子を再現した体験式の模型が置かれていて、次のような説明がある。

一人で渡るときは、籠の中で立つてプランコを漕ぐようにゆすりながら中央まで進み、そのあと引き繩を手繰り寄せるようにして対岸に渡ったそうで、大変な作業で慣れない人には難しく危険でした。普通の旅人は、両岸にいる籠当番の村人に繩を引いてもらってました。

二六 「一度林前見遠公、静聞真語世情空」(『古今禅藻集』卷七所収、唐・栖白「寄南山景禪師」)。

二七 前掲『青搆泉達録』四六一頁。

また、江戸時代には、詩人や俳人がいくつかの記述を残している。芭蕉の門下の凡兆は、元禄頃、既に、「猿蓑」において、「越より飛驒へ行とて、籠のわたりのあやうきところどころ、道もなき山路にさまよひて、鶯の巢の樟の枯枝に日は入ぬ」と詠んでいる。また、寛齋より後（文化七年）のことではあるが、先述の富山藩六代藩主前田利與の側室で八代藩主前田利謙の生母・自仙院は、「見るだにも 心ぐるしき つなでなは かごのわたりの うきせなるよを（見るだけで不安になる（籠を引く）引き綱の縄を用い 憂き瀬（世）を籠で渡るのだから）」^{二八}と詠んでいる。寛齋もまたこの険しい「籠渡」を漢詩にした。

④ 籠渡（籠の渡）

在飛越之境蟹寺邨、即神通上流也。崖高水急、土人用曲木造一器、形似盛土畚、貫以一條索、繫於兩岸木架、人過則縛於器中、用遊索、往来相牽以渡之、俗喚做籠渡。（飛越の境、蟹寺邨に在り。即ち神通の上流なり。崖高く水急なり。土人、曲木を用いて一器を造る。形、土を盛る畚に似て、貫ぬくに一條の索を以てし、兩岸の木架に繫く。人過ぎらんとせば則ち器中に縛り、遊索を用い、往来は相牽きて以て之を渡す。俗に籠渡と喚び做す。）

懸崖纒借草繩通 懸崖 纒に草繩を借りて通す

溪暗奔流雨雜風 溪 暗くして 奔流し 雨 風に雜る

未到前頭神死盡 未だ前頭に到らざるに 神 死して盡き

駕空身在小籠中 空に駕する身は 小籠の中に在り

【現代語訳】

（飛驒と越中の境の蟹寺村は、神通川の上流にある。崖が険しく水の流れも急で、土地の人々は曲がった木を用いて一つの入れ物を作る。その形は、土を運ぶ畚に似ていて、一本の縄を通して、その縄を兩岸の木で組まれた桁に架ける。人が川を渡るときは、その器

二八 廣瀬誠著『越中の文学と風土』（桂書房、平成十年）二七六頁。

の中に縛り、網を用いて、行き来するときは、双方が引つ張って渡し、俗に籠の渡しと呼ぶ。）

切り立つ崖は、草で編んだ縄だけを頼りに渡る。薄暗く流れの急な溪谷に、雨が風に混じって降る。まだ向こう岸に着いていないのに、我が魂はすっかり消し飛んで、空をかける我が身は、小さな籠の中にある。

【解説】

寛齋が渡ったのは、蟹寺かんでら（現在の富山市蟹寺）から谷（現在の飛騨市神岡町谷）への、最もよく知られた籠の渡しであった。詩は、起句で籠の渡しの用途と危険を端的に言い、承句で溪谷の景全体を描写し、転句と結句で、籠の中の自身に焦点を当て引き撮影を行い、その時の心情を述べ、険しさを一層浮き立たせている。

ちなみに、これから訪問する飛騨の赤田臥牛にも「籠渡」一首がある。その場所は、「在飛騨州北界中山村、神通川水次、別曰谷（飛騨州北界中山村に在りて、神通川の水次なり、別に谷と曰う）」の説明によって、「谷」であることが分かる。蟹寺から谷への籠渡を、寛齋は蟹寺で詠み、臥牛は谷で詠んだことになる。臥牛の「籠渡」詩には次のようにある。

籠渡二九 赤田臥牛

貫籠縁一策 籠を貫ぬきて一策に 縁る

俯仰意如何 俯仰して 意うところ 如何

絶岸横蒼靄 絶岸は 蒼靄に 横たわり

奔川躍白波 奔川に 白波 躍る

道同飛鳥去 道 飛鳥と同じく 去り

人在半空過 人は 半空に在りて過ぐ

山國通商利 山國 商利を通わし

二九 前掲『臥牛山人集初編』卷之三「五言律」。

来輸魚與鱈 来たり輸す 魚と鱈とを

(一本の綱が籠の頼りだ。見下ろした感じはどのようか。断崖が暗い霧の中に横たわり、急流に白波が踊っている。飛ぶ鳥と同じ道を進み、人は空中をよぎり来る。(こうして) 山の地で商いができ、魚や塩を売りに来ることができなのだ。)

臥牛詩は、末聯に飛驒街道を利用する目的を詠んでいる以外は、内容は寛齋詩と類似している。他に、江戸時代の修験僧(山伏)野田泉光院も、『日本九峯修行日記』の文化十二年八月二十四日の項で、籠の渡しについて「日本一難所渡り也」と記している。

「片掛村立・・・駕籠の渡しとは此所也。兩岸より綱を三筋張り、長さ三十尋餘、此綱より水迄六間計り、川深さ不知。大石の間を滝の如く水落ちる也。其駕籠と云ふものは、カツラの八寸廻り計りにて、二本を十文字に打違へ拵へたる物也。：日本一難所渡り也。」^{三〇}
寛政九年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八五頁。

寛齋は、続いて、藤橋も詠う。現在、神岡町の中心部を流れる高原川に架かる藤波橋は、昭和五年(一九三〇年)に完成した鉄橋で、赤く塗られているのでとりわけ目を引くが、この橋の場所には、かつて藤蔓で造られた橋「藤橋」があった。

『近世畸人伝』の執筆者として知られる伴蒿蹊(一七三三〜一八〇八)は、寛齋が詩を詠む数年前にここを訪れ、随筆『閑田耕筆』(寛政十一年刊)において、藤橋と籠渡について記しているが、高原川に架かる藤橋は三か所あると言う。舟津(現在の神岡町船津)、茂住(現在の神岡町茂住)、大島(現在の益田郡小坂町大島)の藤橋がそれである。「こゝにまた此頃、飛驒の人田中紀文といふが訪来て、其國の藤ばし、かごのわたりの事をかたり、且記せるものを示さる。藤橋三所有、其あらはれたるものは、吉城郡舟津町村にありて高原川にわたす。東西各民家あり。西を朝浦といひ、東を東町といふ。川の両旁石崖突出せる上に架たるものにして、歳ごとに近県の民、相つどひて改作る。長三十三間餘、濶数尺、一柱を建す。藤を經にし、木を緯にして、織こと席のごとし。往々木を横へて、歩を進るの程限とし、両辺藤索を張て欄干に代ふ。是を攀て渡るべし。然も風に触てゆらめくからに行人難み、あるひは匍匐て前む事能ざるも

三〇 野田泉光院著『日本九峯修行日記』(昭和十年、杉田直出版)三三四頁。

のあり。土人は重きを負つたゞきて、しかも彼程限を踏で進む。かつて一步をあやまたず……同郡茂住村、益田郡大島にもまたありといへり。籃のわたりは吉城郡中山村に在て、神通河に架す。川の北は蟹寺ヲ里大カシテ村とて、越中の南鄙なり。籃渡とは橋にあらず。西域伝にいへる度索トセクといふもの歟。其兩岸絶壁にして、河の流れいちはやく、水に航すべからず、岸に橋すべからず、故に大索三筋を張て岸に架し、懸るに小籃をもてし、人其中にうづくまるを、人其中にうづくまるを、籃に両索ありて、前岸曳之後岸送之、南北より相助。からうじて渡る。土人は男女をいはず、手をもてみづから索をたぐりて、たやすく行かひすること神のごとし。籃は木を揉めて幹とし、底は藤をもてめぐらし、編こと蜘蛛のあみを結ぶがごとし。三の大索、月毎に一筋を更るといふ。其往来のしげきこと知るべし。飛驒より越中に行道あまたあれど、此道便なればとかや。」三三

以下に、寛齋が詠んだ藤橋を見てみよう。

⑤ 藤橋（藤橋）

在飛州茂住舟渡等邨倚立木架於兩岸巨石、排繫藤索緯以断木、長三十丈幅四尺許。（飛州茂住・舟渡等の邨に在りて、木架を兩岸の巨石に倚立し、藤索を排繫して、緯るに断木を以てす、長さ三十丈、幅四尺許りなり。）

枯藤千尺織危橋 枯藤千尺 危橋を織る

箇裏行人酸骨消 箇裏 行人 酸骨 消す

宛似晴溪涼浣布 宛も 晴溪に 浣布を涼すに似たり

狂風簸弄更飄揺 狂風 簸弄して 更に飄揺す

【現代語訳】

（飛州の茂住・舟渡（船津）等の村では、木架を兩岸の巨石（埋め込まれた岩杭）に縛り付けて、藤蔓を編んで並べて、断木に束ねる。

長さ三十丈、幅四尺ばかりであった。)

長さ千尺の枯れた藤を用いて危橋が編まれている。この中では旅人の悲しみや怒りなど吹っ飛んでしまう。まるで晴れた溪流の上に洗濯した布を干しているようで、強風にあおられると一層ゆらゆらと揺れる。

【解説】

茂住村は、今は東京大学スーパークミオカンデがあるあたりであるが、高原川が流れていて、かつてはそれを渡る藤橋があった。この詩はその藤橋を詠んだ一首である。村には越中東街道が通っていた。藤橋について、『斐太後風土記』(巻十六)「吉城郡下高原郷舟津町村」には、「藤橋 吉城郡下高原郷舟津町村にあり、高山より丑方行程八里内、高原川へ懸渡。」とその場所が記されている。また、『飛州志』には、藤橋の形状が次のように記されている^{三〇}。

橋軸方向に数本の綱が「踏み藤」として兩岸に張り渡され、塔柱は無く橋面上の両側に2本の「手摺藤」と呼ばれる太い白口藤の綱が貼り渡され。これ等の藤綱は兩岸の岩や岩片中に埋め込まれた岩杭に結び付けて定着されていた。雑木が踏み藤の上に横並べして「踏み木」と呼び、細藤綱を踏み木に絡めつけて舗板の代わりとした。また、両端の踏み藤は釣藤により手摺藤に結び付けられている。

一方、猪谷関所館発行の「通行手形だより(No.13)」には、元禄元年(一六八八)から同二年(一六八九)にかけて、円空上人がこの地を訪れ、藤橋について「茂ずみなる 谷の藤橋 結らん 山おり姫の 幡かとぞみる」と詠んだことが紹介されている。藤橋がゆらゆら揺れる様子を、寛齋は「浣布」に、円空は「幡」にと、いずれも長方形の一枚の布状のものに見立てている。なお、『臥牛山人集初編』にも、船津で詠んだ「藤橋」と題する詩一首が収められている^{三一}が、藤橋は虹に喩えられている。

三二 山根巖「我が国における江戸期から明治期への釣橋の展開(その7)―江戸期の古典的釣橋から明治期の鉄線橋への変遷」(土木史研究講演集、2009年) <http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00902/2009/29-0091.pdf>

三三 「烏藤千萬縷、橋架緑波中、…疑是通津處、行人直蹈虹。(黒い藤蔓幾万本もが橋に架かり緑の波の上にある、…ここは渡し場のようで、行きかう人は虹を踏んでいるようだ。)」

「酸骨」は憤りや悲しみをいう。「浣布」は、洗濯した布のことか。「簸弄」はあおりなぶること。
寛政九年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八五頁。

⑥ 宿茂住山中（茂住山中に宿る）

日落青溪路未窮 日落ちて 青溪 路未だ窮まらず

投暝乱石水聲中 暝に投じて 乱石 水聲の中

孤眠不作燈前夢 孤眠 燈前の夢を作さず

錯認山林竟夜風 錯り認む 山林 竟夜 風なるかと

【現代語訳】

日は沈んだが溪谷の道はまだ尽きない。目を閉じて眠りに就こうとしても、怪石にぶつかる水の音が耳に聞こえる。孤独な眠りは灯の前で夢も見ず、（その水の音を）山林で一晩中、風が吹いていたと勘違いした。

【解説】

大淵寺から飛騨の茂住まで行き、そこで、また一宿となった。この地は、江戸時代、銀の産出地として知られ、比較的豊かなところであり、神通川水系の高原川が流れ、水流の豊富などところでもある。本詩は、茂住に宿泊した夜、河水の音のあまりの強さに夢を見ることもできない、すなわち眠ることもできないと詠んだ一首。「燈前夢」^{三四}とは、静謐な中で美しい忠州（巴南城）を見て回る夢を見た、と詠う白居易詩「中書夜直夢忠州」の中の一語であり、河水の音の強さを際立たせるために用いたものである。

「投暝」は、「得暝」から類推して「眠る」という意味か。「竟夜」は、一晩中の意。

三四 『白氏長慶集』巻十九「中書夜直夢忠州」に「閣下燈前夢，巴南城裏遊」とある。

寛政九年、『寛齋先生遺藁』卷二、二八五頁^{三五}。

⑦ 四月十三日荒木道中作（四月十三日、荒木道中の作）

浸種邨邨水満田 種を浸す邨邨 水 田に満ち
不寒不暖雨如煙 寒からず暖かからず 雨は煙の如し
桃紅柳緑山中暮 桃は紅、柳は緑 山中の暮れ
又是清明前後天 又 是れ 清明前後の天

【現代語訳】

種籾を蒔く時季になった村々では、田には水が張られた。寒くなく暖かくもない。小糠雨が煙のように降る。桃の花と柳の緑が色鮮やかな山中の暮どき。またこれも清明節前後の日。

【解説】

越中から高山への街道として「越中蟹寺へ 谷々中山々横山々もすみ々舟津町々寺林々八日町々荒木々高山」と記された「寛永国絵図」^{三六}がある。本詩は、茂住から高山に向かう途中、高山の一つ手前の荒木で、村全体を眺望して詠んだ詩である。船津からは二日経っている。清明節の夕刻、農家は稲の種をまき終え、田には水が張られ、暑からず寒からずのちょうど良い春の日。小糠雨が緑の柳と赤い桃の花をそっと濡らし、のどかな田園風景が広がっていた。

中国で清明節前後を詠んだ詩は多いが、以下に掲げる王維の詩「田園楽」もその一つであり、詩中に本詩同様に「桃紅柳緑」「煙」の語が用いられる。ただし、寛齋の詩に詠まれた時間帯は暮どきであり、王維の詩は朝である。

三五 「道恥師承佛山尊者命導余於飛州、途中有贈」「籠渡」「藤橋」「宿茂住山中」「四月十三日荒木道中作」は、「遊飛州作」として『寛齋百絶』（寛政九年）にも収められている。

三六 川村博忠編『寛永十年巡見使国絵図日本六十余州図』（柏書房、二〇〇二年）。

田園楽 王維^{三七}

桃紅復含宿雨 桃は紅にして 復た宿雨を含み

柳緑更帶朝煙 柳は緑にして 更に朝煙を帶ぶ

花落家僮未掃 花落つるも 家童 未だ掃はず

鶯啼山客猶眠 鶯 啼きて 山客 猶ほ眠る

寛政九年、『寛齋先生遺藁』卷二、二八五頁下。

やっと、臥牛の住む飛驒高山に着いた。臥牛は、一生涯、他地に遊学することなく飛驒の地にとどまって、独学で儒学漢学を学んだ人物としても知られるが、寛齋は、臥牛に招かれて訪れたのであろう。そこで詠んだ詩が次の一首である。

⑧ 遊飛驒、訪田山人伯宜、為邀宿雲峰山寺。有詩見贈次韻為酬。(飛驒に遊び、田山人伯宜を訪れ、邀^{まね}かれて雲峰山寺に宿す。詩の贈らるる有りて、韻に次して酬と為す。)

舊聞高隱占山林 舊^{むかし}聞く 高隱 山林を占めると

踏破重雲此遠尋 重雲を踏破して 此に 遠く尋ぬ

衝雨法堂延宿客 雨を衝^ついて 法堂 宿客を延^{まよ}き

穿花祇樹駭棲禽 花を穿ちて 祇樹 棲禽を駭^{おそ}かす

論交先勸盃中物 交を論じて 先ず 勸む 盃中の物

題句聊酬世外心 句を題して 聊^{ひか}か酬^むゆ 世外の心

三七 『王右丞集箋注』卷十四「近体詩三十三首 田園楽七首其六」。

相對閑談不知倦　相對して　閑談し　倦を知らず
孤燈剪盡夜方深　孤燈　剪り盡くし　夜　方に深し

【現代語訳】

（飛驒に行き、臥牛山人を訪れ、雲峰山寺に泊めていただきました。詩をお贈りいただいたので、次韻にてお返しといたします。）
昔、立派な隠者は山林にお住みだと伺い、幾重もの雲を越えてここまでやってきました。雨を犯してまいりましたところ法堂は宿泊客を招き入れてくださり、花をかき分けて来たところ境内では鳥も驚いています。誼を結び、まず酒を勧めていただき、私はいささか詩を作り、世俗とは異なる思いをのべましょう。（あなた様と）向かい合って語り合い倦むことはありません。蠟燭の芯を切りつくし、夜はすっかり更けてしまいました。

【解説】

田山人伯宜とは、前掲の赤田臥牛のこと。田とは、赤田の一字を取り中国風の姓としたもの。山人とは、文人墨客が雅号等に添えて用いる語で、伯宜は字である。寛齋の旅の目的の一つは、先述のように、臥牛に会うこと。この詩は、飛驒山中の寺院に臥牛を訪ね、意気投合して夜の耽るのも忘れたさまを詠んだもので、「次韻」という手法で記されている。「次韻」とは、原詩と同一の韻を用いる「和韻」のひとつで、厳格には、同一の韻字を同一の順で用いて作るものである。他に、「和韻」には、順にはこだわらず同一の韻に属する字を用いて作る「用韻」と「依韻」がある。

本詩は、「林」「尋」「禽」「心」「深」と、「平声　侵の韻」の韻字を用いている。現存の『臥牛山人集』のうち、同韻であること、かつその内容から推して、原詩は以下の「賦山寺読書」と思われる。ただ、本詩は、原詩の韻字の順序には拘っておらず、厳格な意味での「次韻」ではない。臥牛詩の韻字は、次のように「沈」「禽」「深」「尋」の順で用いられている。

賦山寺読書（山寺読書を賦す）^{三八}　赤田臥牛

三八　前掲『臥牛山人集初編』卷之四、七言律上。

西来秋満白雲嶺 西来の秋 満つ 白雲の嶺

古寺風光夕日沈 古寺の風光 夕日 沈む

林下人稀堆落葉 林下 人 稀にして 落葉 堆くうすよか

窗前雨歇響幽禽 窗前 雨歇やみて 幽禽 響く

禪棲寄迹囂塵断 禪に棲み 迹を寄せて 囂塵ごうじん 断え

石室探書年月深 石室に 書を探して 年月 深し

一榻山中惟寂寞 一榻の山中 惟だ寂寞

杳然巖壑有誰尋 杳然たる巖壑 誰有りてか尋ねん

内容から見れば、寛齋詩の首聯「舊聞高隱占山林（舊聞く 高隱 山林を占めると）」は、臥牛詩の詩題「賦山寺読書（山寺の読書を賦す）」の臥牛が寺で学問に励んだという点と合致する。また、同首聯「踏破重雲此遠尋（重雲を踏破して 此に 遠く尋ぬ）」は、臥牛詩尾聯「杳然巖壑有誰尋（杳然たる巖壑 誰有りてか尋ねん）」に応えたものとみることができる。加えて、寛齋詩領聯「穿花祇樹駭棲禽（花を穿きて 祇樹は 棲禽を駭かす）」は、臥牛詩領聯「窗前雨歇響幽禽（窗前 雨歇みて 幽禽 響く）」を受けて、山寺の静寂の中で、鳥がさえずる中に足を踏み入れたことを詠んだもの、といえよう。

「祇樹」は寺院の境内のこと。「論交」は誼を結ぶこと。「題句」は詩を書くことをいう。

寛政九年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八五頁。

(4) 南行 (二) 再びの片懸

寛政九年の飛騨街道の旅から五年後、寛齋は再び大淵寺および「籠渡」を訪ねることになる。溪谷の美しい地は危険も伴うが、詩人にとっては感興をそそるものであったのだろう。

① 重宿大淵寺贈悟秀禪師（重ねて大淵寺に宿り、悟秀禪師に贈る）

大淵寺在片懸山中、辛巳^{三九}歳予遊飛州曾投宿於此。（大淵寺は片懸山中に在り。辛巳歳、予飛州に遊び、曾て此に投宿す。）
暮夜寒山訪化城 暮夜、寒山に化城を訪ぬ

嶺高谿曲路縱横 嶺高く、谿曲がり 路は縦横なり

林間纒辨佛龕火 林間 纒に辨ず 佛龕の火

雲外遥傳法鼓聲 雲外 遥かに傳う 法鼓の聲

千縷雪堆河漏麵 千縷の雪 河漏麵に 堆もり

八珍玉破芋魁羹 八珍の玉 芋魁羹に 破らる

巳公茅屋曾遊地 巳公の茅屋は 曾て遊びし地

更賦新詩訂舊盟 更に 新詩を賦し 舊盟を訂す

【現代語訳】

（大淵寺は片懸の山中にある。辛巳の年、飛驒に遊んだ折、ここに投泊したことがある。）

夜半、寒冷の山に寺を訪ねた。嶺高く溪谷弯曲し道は縦横に走る。林の間からわずかに寺の明かりが見え、遠くから禪寺の法堂太鼓の音が聞こえてきた。（準備していただいた）麵の上には雪が降り積もるが、芋の吸い物はどんなご馳走よりもおいしい。巳公の茅屋のような（静かで詩を作るにふさわしい）この寺院はかつて訪れたところ、さらに新しい詩を作り旧交を温めたい。

【解説】

唐の詩人杜甫は巳上人という人物が住む静かな空間を「巳公茅屋下、可以賦新詩（巳公茅屋下、以て新詩を賦す可し）」^{四〇}と詠んだ。

三九 寛齋が訪問した年は、「辛巳年」とあるが、「丁巳年」が正しく、一七九七年寛政九年のこと。

四〇 『九家集注杜詩』巻十八「巳上人茅齋」。

そのため、この一句以降「巳公茅屋」は詩作にふさわしいところというイメージが作られ、その後、陸游なども「巳公茅屋曾游處（巳公茅屋は曾て遊びし處）」^{四一}と詠んでいる。室町時代には、禅林の僧の義堂周信が「重和益蘭答実夫見賞」（『空華集』巻二）で「病夫懶賦硯生塵、無奈叢蘭照眼春。送与巳公茅屋下、梅花同夢句還新。（病夫 賦するに懶くして硯に塵を生じ、叢蘭の眼を照らす春を無奈せん。巳公茅屋の下に送与せば、梅花と夢を同じくして句も還た新たなり）」等と詠み、詩を読む理想の地として「巳公茅屋」がとらえられていたことが窺える。

「河漏麵」は、「飴餡麵」とも記し、高粱粉や蕎麦粉などで作った麵をいう。また、「芋魁羹」とは、サトイモの汁物をいい、いずれも粗末な食事をいう。一方、「八珍玉」は「八珍玉食」^{四二}ともいい、ぜいたくな食事をいう。

享和二年、「寛齋先生遺藁」巻二、二九二頁。

② 再遊籠渡（再び籠の渡に遊ぶ）

溪深峭壁石將崩 溪深く 峭壁の石 將に崩れんとす

飛棧雪梯比未曾 飛棧雲梯 比に 未だ曾てあらず

自怪舊遊緣底事 自ら怪しむ 舊遊 底事に縁りて

託身只倚一條繩 身を託すに 只だ 一條の繩に倚る

【現代語訳】

谷は深く峻岩は崩れんばかり。山々の棧道や雪道に架かる梯子はこれまでなかった。以前に来たとき、なにゆえに、ただこの一本の繩に身を委ねたのだろうか。

四一 『劔南詩稿』巻六十三「天王寺迪上人房五十年前友人王仲信同題名尚在」。

四二 金の董解元『西廂記諸宮調』第三巻に「八珍玉食邀郎餐 千言万語对生意。（豪華な食事はあの方を招くためのもの、すべての言葉はあの方に向けたもの）」と見える。

【解説】

再び籠の渡に足を運び、その情景を目の当たりにして改めて恐ろしさを覚えたのだろう。「自怪（自ら怪しむ）」「縁底事（底事に縁りて）」の二語に、その思いが凝縮されている。「自怪」は、自らも驚きふしぎに思うこと。「底事」は「なにごと」と読み、「縁底事」は何事によって、どういうわけでの意。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

(5) 南行 (三) 八尾方面へ

前掲南行(二)で取り上げた二首を含み以下の十四首と合わせて十六首の詩が「南山紀遊十六首」として括られている。いずれも享和壬戌（一八〇二年）の秋のことである。

南山紀遊十六首

享和壬戌予祇役越中、時患左臂疼痛、笠間君績亦患痔、遂訂南山浴泉之行、九月十六日發富山。（享和二年 予、越中に祇役し、時に左臂の疼痛を患う。笠間君績も亦た痔を患い、遂に南山浴泉の行を訂し、九月十六日に富山を發つ。）
（享和二年、私は越中にお仕えしていたが、時に左臂に痛みがあった。笠間君績もまた痔を患っていた。そこで南山に湯治に行くことを約束して、九月十六日に富山を發った。）

① 將遊室牧、途中示君績十韻（將に室牧に遊ばんとし、途中、君績に示す十韻）

蓑笠侵晨發 蓑笠 晨を侵かして發ち

城南歩泥塗 城南 泥塗に歩す

風北雲忽變 風 北して 雲 忽として變わり

細雨看欲無	細雨 看 <small>みる</small> 無からんと欲す
山氣遠近濕	山氣 遠近に 濕おい
水樹尚模糊	水樹 尚お 模糊たり
誰弄天然巧	誰が 天然の巧を弄し
畫此水墨圖	此の 水墨の圖を畫くや
君性耽丘壑	君が性 丘壑に耽けり
探奇輕峻岨	奇を探して 峻岨を輕んず
吾亦不肯後	吾も亦た 後れを肯んぜず
病脚強相俱	病脚 強いて 相俱 <small>あいとも</small> にす
此行非徒爾	此の行 徒 <small>いたづら</small> に爾 <small>しか</small> るに非ず
休暇荷恩殊	休暇 恩殊 <small>いな</small> を荷 <small>にな</small> う
良緣實天假	良緣 實 <small>まこと</small> に 天の假
同遊亦不孤	同遊 亦た 孤 <small>さか</small> ならず
長堤遡川流	長堤 川流 <small>よかの</small> に遡 <small>さかの</small> ほり
谷口路盤紆	谷口 路は盤紆 <small>まが</small> たり
山遊自茲始	山遊 茲 <small>こゝ</small> れより始まる
杖屨莫踟躕	杖屨踟躕すること莫かれ

【現代語訳】

雨具をまとい朝早くに出発し、城南の方、泥道を進む。風が北に吹き雲の様子も急に変わり、小雨も間もなく止みそうだ。山氣は遠近を潤し、水に覆われた樹は模糊としている。自然のこの巧みを誰が水墨画にできようか。君は丘や谷を愛し奇景を探して嶮しさなど

意に介さない。私も君に後れを取るの嫌だ。脚は弱っているが一緒に行こう。この旅は単なる旅ではない。殿の恩寵を賜ったもの。良い機会は天が与えてくれたもの。共に行く人がいて一人ではない。長い堤は河沿いに連なり、谷口では、路はぐるぐると巡っている。山遊はここから始まる。老人よ、躊躇せずに行こう。

【解説】

「南山浴泉の行」とは、八尾の室牧川の東岸にあった温泉への旅のこと。この温泉は、下の茗温泉といい、天明七年の開湯。現在は廃湯し、わずかに昔の看板が道のそばにあり、往時のよすがを留めている。寛齋が行ったのは享和二年（一八〇二）、九月十六日。九代藩主の前田利幹の時であり、その高配を受けたようである。同道したのは、痔を患っていた笠間君績という人物であるが、詳細は不明である。

寛齋がこの地を訪れてから四十余年後の一八四九年（嘉永二年）、下の茗温泉に、「左肋痠痛」を患った金沢の名医城川則民が湯治に訪れ、日ならずして全快した。そこで、城川は「扶桑上等の温泉随一なり」とあちこちの患者に勧めた結果、一時期、広く知られることになったと言われる^{四三}。また、一八五〇年（嘉永三年）に、十代藩主・前田利保も湯治に行ったという。

「天假良縁」とは、「天假良縁、安得当面蹉過（天が假せし良縁、安くんぞ当面蹉過するを得んや）」^{四四}などを用い、「天が与えた良い機会」のこと。「杖屨」は、「つえ」と「くつ」から転じて「老人」をいう。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九〇頁。

② 八尾邑（八尾邑）

邑在治城西南四十里。山中有仁部、室牧、長溪、大長溪、稱野積四溪。八尾即四溪合流之處。（邑は治城西南四十里に在り、山中に仁部、

四三 坂井誠一監修『続八尾町史』（一九七三年）八四二頁。

四四 明・高攀龍『高子遺書』卷八上「答劉念台」。

室牧、長溪、大長溪有り、野積四溪と稱す。八尾は即ち四溪合流の處。

千家聚落四溪頭 千家の聚落 四溪の頭

囊括山嵐據下流 山嵐を囊括し 下流に據る

幾箇擔丁群作市 幾箇の擔丁 群れて市を作す

紅梨黃柿滿林秋 紅梨黃柿 滿林の秋

【現代語訳】

（村は、富山城下から西南四十里に位置し、山中に仁部、室牧、長溪、大長溪があり、これを野積四溪という。八尾は四溪合流の処である。）
戸数千軒ほどの集落は四つの溪流の先であり、山の豊かさを残らず包み込んで下流に位置する。（そこでは）何人かの担ぎ男たちが集まり市を開き、木々には赤い梨や黄色い柿がたわわに実り秋満開である。

【解説】

明治十七、八年頃の様子を描いた『越中遊覧志』^{四五}には、八尾のことが、「八尾ハ婦負郡中の名邑にして、南北の長さ九百間、東西ハ百八十間、戸数壹千五百あり。：この諸川の上流に大長谷・室牧・東野積谷・仁歩谷ありて総稱して野積四谷といひ、谷中一百七村ありて、産物に饒し。八尾ハその要衝に当り、谷中の民みなこゝに貿易するを以て、ことに繁盛を致せり。商賈も多く、また邑中よりも出すところの物産多く、その主眼なるもの生絲・繭・蚕印紙・楮・紙・真綿・枝柿などなり」と記されている。八尾の地理的特徴、集落の規模、市場のこと、産物（柿が採れること）など、本詩との類似点は少なくない。寛齋が、土地の人々の説明を聞き、それを詩に詠んだものと想像される。

「囊括」は、一切の事物を包み込むこと。「山嵐」は、「山の豊かさ」の意味。

享和二年、『寛齋先生遺藁』卷二、二九〇頁。

四五 竹中邦香著、広瀬誠校訂解題『越中遊覧志』（言叢社、昭和五十八年）一一四～一一五頁。

③ 室牧 (室牧)

在八尾西南二十里許、郵名下之茗、溪側温泉出焉。(八尾西南二十里許に在り、郵名は下之茗、溪側に温泉出づるなり。)

三間茅屋半垂溪 三間の茅屋 半ば溪に垂る

身在懸崖樹畔棲 身は 懸崖の樹畔に在りて 棲む

非有靈泉能療疾 靈泉の 能く 疾を療する有るに非ざれば

誰人來更踏雲梯 誰人 來りて さらに雲梯を踏まん

【現代語訳】

(室牧は八尾の西南二十里ばかりのところにある。村名は下の茗で、溪谷の側に温泉が湧き出ている。)

三間ほどのあばら家が半ば溪谷に垂れるようにあり、私は切り立った崖の木の傍にいる。良く効く靈泉でなければ、だれがこの高く危険な道をここまで来るだろう。

【解説】

下の茗温泉は、室牧川の上の切り立った崖の上に垂れるようにあり、極めて小さなあばら家であったが、確かに効能はあったようだ。そのことは、前掲『越中遊覧志』^{四六}にも、次のようにある。

「八尾の邑を西南に出れば野積川あり。橋を架す。向ひハ高熊村にて、是より室牧川を右にし、川にそひ谷内・中・上野・細瀧の諸村を経、山ミちを上り下りてゆけば下の名の温泉にいたる。温泉の澡場ハ室牧川のほとり、兩岸絶壁擁合し逕路窮極して一水わづかに通ずるところの南岸にあり。…泉ハ川の北岸にありて井のごとし。上に楼を設け釣瓶もて汲上げ筧より南岸の湯槽に通ずべくなせり。槽ハ一ヶ所なれども、四つに区劃し、おの／＼方一間ばかりなるべし。また別に小槽あり、縦一間横半間ばかりなるべし。泉ハ温度極めて低く、冷泉かと疑ふばかりなれば、火もて煖めて浴す。甚だ透明ならず、些の硫気あり。疝氣・中風に効ありと云。客房清潔ならずといへども、地幽邃にして殆ど出塵の思ひあり。…この泉ハ曾て藩侯の來られしことありとぞ。」

四六 前掲『越中遊覧志』一一七―一一八頁。

「雲梯」は、高い梯子のこと、ここでは「踏雲梯」で、高い梯子のような危険な道に来ることをいう。
享和二年、『寛齋先生遺藁』卷二、二九一頁。

④ 自室牧登貉嶺作（室牧自り貉嶺に登りて作る）

老身病脚步歩艱	老身	病脚により	歩歩艱し
閑遊試踏山谷間	閑遊	試みに踏む	山谷の間
十年手携方竹杖	十年	手に携う	方竹の杖
僕僕猶喜堪登山	僕僕たりて	猶お喜ぶ	山に登るに堪えるを
羊腸逕細不容足	羊腸	逕細くして	足を容れず
前趾後趾相聯属	前趾後趾	相聯属す	
嶺高躄重易疲労	嶺高く	躄重くして	疲労し易く
踞石遠景目始矚	石に踞せば	遠景	目に始めて矚す
北溟渺茫遠接天	北溟	渺茫として	遠く 天に接し
布帆如鳥影飄然	布帆は	鳥の如くして	影 飄然たり
西眺能州東越後	西は	能州を眺め	東は越後
山脈絶處是境川	山脈	絶える處	是れ 境川ならん
憶昨扈從自此道	憶うに	昨 扈從	此の道自りす
炎暑銷盡秋已老	炎暑	銷盡して	秋 已に老けり
登陟自欲豁愁襟	登陟し	自ら	愁襟を豁かんと欲す
無那郷思落懷抱	無那	郷思の懷抱に	落つるに

【現代語訳】

老いた身に病の足では、一步一步が容易ではなかったが、散策に山谷の間を歩いてみた。十年共にした竹の杖。旅の疲れの中、山登りに堪えられるのがうれしい。うねうね曲がった細い道は歩くのに難儀するが、前足に後足をびたりと付けて進む。峰々は高く体は重く、疲れやすい。石に腰かけて初めて遠景が目に入る。北方に広がる海は果てしなく広く天に接し、船の帆は鳥のようにひらめいている。西は能登、東は越後、山脈が途絶えているところは（富山県と新潟県の県境にある）境川か。前にかの境川からの道を殿に随行したことがあった。いま、暑い夏は終わり、秋もずいぶん深まった。山に登って、愁いを晴らそうと思うが、故郷を想う気持ちが胸に湧いて来るのはどうしようもない。

【解説】

狛峰は、四七七メートルの低山。かつては、富山の葉売りに葉草を提供するために来山採取する人がいたという。供の者は、寛齋の年齢（五十三歳）を考慮して、登山に堪え得るかと心配したが、寛齋はいたって健脚であった。順調に山道を進み、ひと休みして、四方を見渡せば、能登や新潟が見える。富山赴任のため新潟を通ってきたから、年月が経ったことを思い、時の移ろいの速さを知る。古来、中国では、小高い丘に登り、故郷を思う風習があった。「登高」と言い、重陽の節句に行われた。正にその季節、愁いを晴らそうと思っても、「懐抱」に「郷思」が湧き出るのはどうしようもないのである。

「僕僕」は、「風塵僕僕」などともいい、旅などに苦勞し疲れているさま。「北溟」は北の海、「渺茫」は広く果てしないさま。「愁襟」は、「愁懷」と同じ意。「扈從」は、随行者のこと。「無那」は、「無奈」と同じく、「いかんぞ」あるいは「いかんともするなし」と読み、「どうしようもない」の意味。

享和二年、『寛齋先生遺藁』卷二、二九一頁。

⑤ 溪居即事二首 (溪居即事 二首)

其の一

三椀茶香睡始除 三椀の茶香 睡 始めて除かれ
 紅毯展取覓詩初 紅毯 展べ取る 詩を覚めるの初め
 忽聴奚僕喧嘩甚 忽として聴く 奚僕 喧嘩することの甚しきを
 釣得青溪一尺魚 釣り得たり 青溪一尺の魚

【現代語訳】

三倍のお茶でやっと眠気が取れた。赤い毛氈を取って広げ、詩を書こうとした時、突然、川で使用人らの騒がしい声があった。清流で一尺ばかりの魚を釣ったのだ。

【解説】

情景が眼前に髣髴と浮かび上がってくる一首である。「即事」は「その場の事柄」の意。「奚僕」は「使用人」のこと。「喧嘩」は、日本語の意味と異なり、大きな声で騒ぐこと。ここでは、一尺ばかりの魚を釣り上げて騒いでいることを指す。

其の二

遠近山山自在過 遠近の山山 自在に過り
 游蹤只恨易消磨 游蹤 只恨む 消磨し易きを
 度橋欲覓題名處 橋を度り 題名の處を覚めんと欲するも
 無奈寒溪頑石多 奈無せん 寒溪頑石の多きを

【現代語訳】

遠近問わず山々を思うままに來たが、遊歴した足跡が容易に消えて無くなるのは残念だ。橋を渡って、名前を刻むところを探そうと

思ったが、冷たい溪谷には硬いつまらぬ石が多くて刻みにくい。

【解説】

中国では何かを成就したり、旅に出たりすると、記念として石に名を刻む（或いは書く）習慣があり、それを「題字」という。例えば、白居易が及第したときに、「慈恩塔」下に名を書いた（「詩曰、慈恩塔下題名處、十七人中最少年。」^{四七}）という。寛齋も、そのような文化的行為として「石に名を刻もうとした」と考えられる。

「題名處」とは、自分の名前を書くところという意味。「游蹤」とは遊歴すること。「頑石」とは、硬くとるに足らない石をいう。享和二年、「寛齋先生遺藁」巻二、二九一頁。

⑥ 閑歩到細滝邨（閑歩して細滝村に到る）

一杖清溪路 一杖 清溪の路

行行日已斜 行き行きて 日 已に斜めなり

懸燈山上寺 燈を懸く 山上の寺

擣紙竹間家 紙を擣く 竹間の家

露草装秋景 露草は 秋景を装い

霜楓駐夕霞 霜楓は 夕霞に駐まる

無人同此況 人の此の況を 同じくする無く

獨立数帰鴉 獨り立ちて 帰鴉を数う

四七 『欽定古今圖書集成』「明倫匯編・人事典」卷三十九。

【現代語訳】

一本の杖を支えに清流に沿った道を歩み行けば日はすでに西に傾いている。山の上の寺には明かりが灯り、竹林の家からは紙を打つ音が聞こえる。つゆ草は秋の風情を醸し出し、霜に打たれて赤い楓は夕日の中で赤をとどめているが、この景色を共にする人もなく、私は一人たたずみ、ねぐらに帰る鳥を数える。

【解説】

川のせせらぎに沿って杖を手にそぞろに歩いて細滝まで来た。細滝は、室牧川岸の村。時は夕暮れ、見上げれば山の上の寺には灯がほのかに灯り、竹間の家からは紙を打つ音が聞こえる。露や霜にあたった赤い楓は、夕陽の中で美しさを際立たせる。しかし、異郷にいる自分には共にこの景色を愛でる人はいない。ひとり秋景の中に立ち、巢に帰る鳥を数えると、家族から離れている寂しさが一層身に染みた。ねぐらに帰る鳥を独りで数えることの寂しさは、漢詩の中で、「無山供望眼、独立数帰鴉」^{四八}と詠われる。

なお、八尾は和紙の生産地として今も知られていて、前掲『越中遊覧志』^{四九}に、「紙ハ笠紙・半紙・八寸・鳥の子・道市紙などとす。」とあり、そのうち「鳥の子・道市紙」は、売薬を包装するものとして用いられていた。「擣」とは、漉した紙を砧打ちすることをいう。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九一頁。

⑦ 舟尾山中得悟秀禪師書（舟尾山中に悟秀禪師の書を得る）

途中接君書 途中 君の書に接す

封皮坐石披 封皮は 石に坐して披く

但言秋色好 但だ言う 秋色好し

四八 元・唐元撰『筠軒集』巻五「呉岸九日小集青山學正謙父教諭莊子正酒散有懷」。
四九 前掲『越中遊覧志』一一五頁。

莫負看山期 山を看るの期に 負くこと莫かれ、と

【現代語訳】

途中で、あなたの手紙を受け取り、石に腰をかけて封を切りました。「秋の景色は素晴らしい、山々を見るのに良い時期を逃してはなりません。」とだけ書いてありました。

【解説】

「舟尾」とはどこか、富山県にその地名はない。或いは、今日、猿倉山森林公園のある「舟倉」のことかもしれない。この地は、前に詩に読まれた「細滝」と次の詩の舞台「小羽邨」^{五〇}の中間に位置する。

さて、旅先に届けられた、大淵寺悟秀禪師からの手紙には、ただ「秋の景は素晴らしい。機を逃さずに」とのみ書いてあった。「秋色」とは、山の木々の紅葉を言うのであろう。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

⑧ 雨後即目 (雨後 即目)

寒山一路雨晴天 寒山一路 雨 晴るる天

又逐秋光歩水邊 又^ま 秋光を逐いて 水邊を歩む

多少人家深樹裏 多少の人家 深樹の裏^{うら}

溪雲近接午炊煙 溪雲 近接す 午炊の煙に

五〇 この旅では、九月十二日に、「窮婦嘆」も詠んでいるが、これについては別稿にて論じる。

【現代語訳】

ものさびしい山の道、雨が晴れた空。再び秋の風景を追って水辺を歩く。何軒かの人家が林の奥深いところにあり、谷にかかった雲が昼餉の煙に接している。

【解説】

道歩き、雨宿りしたのち空が晴れると、雨に洗われた山や川がひととき美しく目に入る。目を転ずれば、昼餉の準備の煙がまっすぐに立ち上っていた。一方、雨上がりの溪谷からは雲になりかけの霧のようなものが見えた。その二つがくっついて見えたのかもしれない。明るい「晴天」「秋光」の下、「深樹」から上り出る「午炊煙」と溪谷にかかった「溪雲」もまた目にさやかに映ったのであろう。享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

⑨ 遊山田途中紀事（山田に遊び、途中に事を紀す）

一箇茶籠到處携 一箇の茶籠 到る處に携う

手中紅拂亦相隨 手中の紅拂 亦た相い隨う

山邨不慣官人過 山邨 官人の過ぐるに慣れず

怪殺耕夫立半時 怪殺せし耕夫 立つこと半時

【現代語訳】

一つの茶籠をどこにでも携えていく。手にする赤いふさのついた杖も一緒だ。山の村では、役人が通るのが珍しいのか、農夫がひどく怪しんでしばらく立ったままになっていた。

【解説】

茶籠については、寛齋に「茶籠」と題する七言絶句（『寛齋先生遺藁』巻三、三〇〇頁）があり、「煎茶の器物は其の中に備具す。遊山に不可欠の物なり。（お茶を煎じる道具は、この中に収める。山巡りに不可欠のものである。）」と説明されている。

茶籠 煎茶器物備具其中、遊山不可欠之物（茶籠 煎茶器物を其中に備具し、遊山に欠く可からずの物なり）

遊山無處不提携 遊山 提携せざる處なし

筠籠相從杖藜 筠籠 相從い藜杖に伴う

不買杏花邨裏酒 杏花邨裏の酒を買わず

先安松下汲清溪 先ず 松下に安んじて 清溪を汲む

（山巡りには必ず（茶籠を）携え、籠には藜の杖を伴にする。杏花村にあるような酒は買わないで、まずは松の木の下に休んで清い溪流の水を汲む。）

中老の文人にとって、山巡りには、茶籠と杖が必須の携帯品であったのだろう。一方、田舎では、人々が文人の姿を目にすることなどめつたにない、農夫はひとしきり曲げた腰を伸ばしながら、その異邦人をいぶかしげに眺めていたに違いない。

「怪殺」の「殺」は、動詞の下についてその動詞の程度が甚だしいことを示す助字。「怪殺」は、「非常に怪しむ」の意味。
享和二年、『寛齋先生遺藁』卷二、二九二頁。

⑩ 九月廿七日雷雨終日不能出門作短歌（九月廿七日、雷雨終日、門を出づる能わず、短歌を作る。）

雷公車輾万山巔 雷公の車は 輾ぶ 万山の巔

風伯雨師又赫然 風伯雨師 又た 赫然たり

電光欲燒寒林樹 電光 寒林の樹を 焼かんと欲す

粒雪敲屋板欲穿 粒雪 屋を敲き 板 穿たんと欲す

漫遊暫來住此處 漫遊 暫く来たつて 此の處に 住まり

掩戸閑坐日如年 戸を掩い 閑坐すれば 日は年の如し

瓶茶傾盡腸猶果 瓶茶 傾け盡くし 腸 猶お果なり

一帙黄卷只引眠 一帙の黄卷 只だ 眠を引く
 夢破溪聲十分壯 夢破れて 溪聲 十分壮たり
 深寒透徹幾重錦 深寒 透徹す 幾重の錦
 客心寧無異土感 客心 寧くんぞ無からん 異土の感
 不似關東九月天 關東 九月天に似ず

【現代語訳】

雷があらゆる山の頂に鳴り響き、風の神、雨の神も激しく憤っている。雷の光は寒々とした林を焼くかのように、霰は屋根を敲き屋根の板に穴を開けるが如きである。気ままな旅でしばらくここに住み、家の中でぼんやりと過ごしていると一日が一年のようだ。お茶を全て飲み切ったので、お腹はまだいっぱいだ。書物は眠気を誘うだけだ。夢から覚めれば溪流の流れが力強く、幾枚もの寝具を透つて寒さが身に染みる。旅人である私の心は、どうして異郷にいる感じを抱かないことがあるか。関東の九月はこのようではない。

【解説】

南游の旅は、九月十六日に出発した。それから二週間ばかりした九月二十七日に記したが、この一首である。単調な生活に、関東を恋しくなったのであろう。「不似關東九月天」という一語に、関東の気候を良しとする寛齋の思いが表れている。類似の表現は、「客舍冬暁」一首にも、「重裘暖帽圍爐坐（重裘暖帽 爐を圍みて坐る）、十月江城無此寒（十月の江城 此の寒さ無し）」とある。

「雷公車」あるいは「雷車」は雷神の乗る車を指し、「雷車」は陸游の詩にも幾例がある。「雷車動地電火明、急雨遂作盆盃傾」^{五二}は、雷声が地に轟き雷光は明るく輝き、雨は盆を傾けたように降ってきた状態を表している。また、「雷車駕雨龍尺起、電行半空如狂矢」^{五三}は、雷の音と大雨を起こす龍が全て起き、稲妻が空中に飛び狂う矢のように光る意である。「雷公車轅」は、雷車がごろごろ転がることから、

五一 陸游『劔南詩稿』卷六十二「七月十九日大風雨雷電」。

五二 陸游『劔南詩稿』卷七「中夜聞大雷雨」。

雷が鳴るさまを表す。「風伯」は四方の風を主る神、「雨師」は雨をつかさどる神をいう。「赫然」は、真つ赤に輝くこと。
享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

⑪ 溪行（溪の行）

閑行従水勢 閑行 水勢に従う

也復出柴門 也復またまた 柴門さいもんを出づ

稍慣山家趣 稍やや慣山家の趣に慣れ

更知城市煩 更に知る 城市の煩しさを

青松秋雨寺 青松 秋雨の寺

紅葉夕陽邨 紅葉 夕陽の邨

散策不辭遠 散策 遠きを辞さず

帰来欲斂昏 帰り来たれば 斂昏れんこんにならんと欲す。

【現代語訳】

溪谷の水音が誘われるままにまた粗末な住処やどを出る。すこしく山居の暮らしに慣れると街の暮らしのわずらわしさが一層身に染みる。青松に秋雨が降る寺、紅葉に夕陽がかかる村。（このような景色の）散策は遠くともよい。（散策を終え）帰ってみれば黄昏たふしになろうと欲していた。

【解説】

詩題の「溪行」は、溪谷に沿って目的もなくそぞろに歩くこと。その静かな山の散策の中で、城下の生活の煩わしさを思った。秋雨に濡れた青々とした松の寺とは宿泊所としていた寺院であろうか。紅葉が夕日に映える村とは小高いところから見下ろしたものであるか。青色と赤色が、美しい秋の景を想像させる。静かに目的もなくひたすら歩いて帰ると、時はいつしか黄昏時になろうとしていた。

「散策 遠きを辞さず」には、散策を心から楽しんでいるさまが窺える。

「柴門」は、隠者などが住む貧しい住まいを指すが、ここでは、山村の粗末な住居を指す。「斂昏」は黄昏時をいう。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

⑫ 出室牧溪（室牧溪より出す）

半月游蹤遍四山 半月游蹤し 四山を遍くす

秋光不忍背渠還 秋光 渠かれに背き 還るに忍ばず

却疑劉阮天台路 却よつて疑う 劉阮天台の路かと

縁底無端戀世間 縁な底に縁りてか 端無はしく 世間を戀う

【現代語訳】

半月ほどあちこちの山々をくまなく巡ったが、秋景に背いて帰るに忍びない。（しかし）劉晨が迷いこんだ天台山の道かと思うと、なぜか理由なく俗世が恋しくなった。

【解説】

八尾の人里離れた山の奥に住居を借り、静かな時を過ごす。山里は、喧噪や、人間関係のわずらわしさや、勤め人としての上下関係を忘れさせてくれる。しかし、越中の山里を心から楽しむというよりはなお強い現実生活への執着が、「縁底無端戀世間（なぜか理由なく俗世が恋しくなった）」一句から窺うことができる。

「劉阮天台路」とは、漢代の劉晨と阮肇が葉草を取りに天台山に行った折、道に迷い仙女の家に世話になったがしばらくして家に帰ると、浦島太郎宜しく昔の村はなく随分と時が経っていたという故事に拠る。「縁底」の「底」は、疑問の助字で「なに」の意味、「縁底」二語で、「何によりてか」「なぜか」と理由を問う語。

享和二年、『寛齋先生遺藁』巻二、二九二頁。

以上、富山藩内を中心に、寛齋が足を運んだ地で詠んだ詩について見た。その場所には、城下からほど近い呉羽、布瀬があり、当時加賀藩領であった新湊の海老江、飛騨街道沿いの溪谷と山村があり、八尾の溪流と村々があった。

そのうち、呉羽を詠んだ詩からは、これまでの資料に殆ど記述されることのなかった当時のその地の様子が詳細な描写によって浮かび上がってきた。新湊で詠んだ詩からは、大伴家持の和歌に刺激された跡が窺え、富山にも家持作品の脈々とした伝承の一端があったことを知り得た。

寛齋が富山周辺で詠んだ詩の中で最も数が多いのが、飛騨街道を南に下る道中の詩である。山間地に入り込むことにより、当地の陰しくも美しい自然が詩情を掻き立てに違いない。またその際、宿泊先が寺院で、案内人も寺院の関係者であったことから、富山藩における知識層の交流が、儒仏の隔てなく、同じ知識層であった儒者、高僧を中心として頻繁に行われていたことも窺えた。

小論は、令和五年度科学研究費補助金基盤研究（C）「江戸明治期漢文笑話集の訳読と研究―江戸後期から明治初期の漢文笑話集を中心に―」（研究課題番号18k00313、代表・磯部祐子）の研究成果の一部である。

